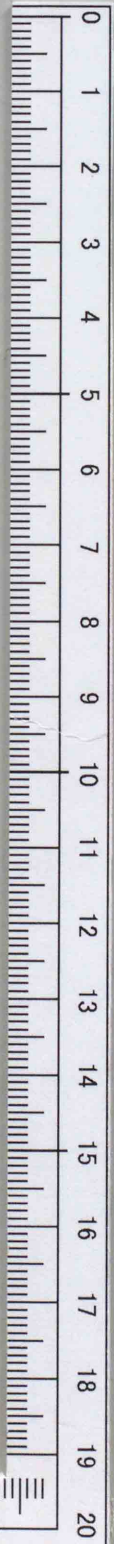


中等國語讀本
 落合直文編
 卷四

375.9
 Oc8
 資料室



30293

教科書文庫

3
810
41-1902
200030
1970

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

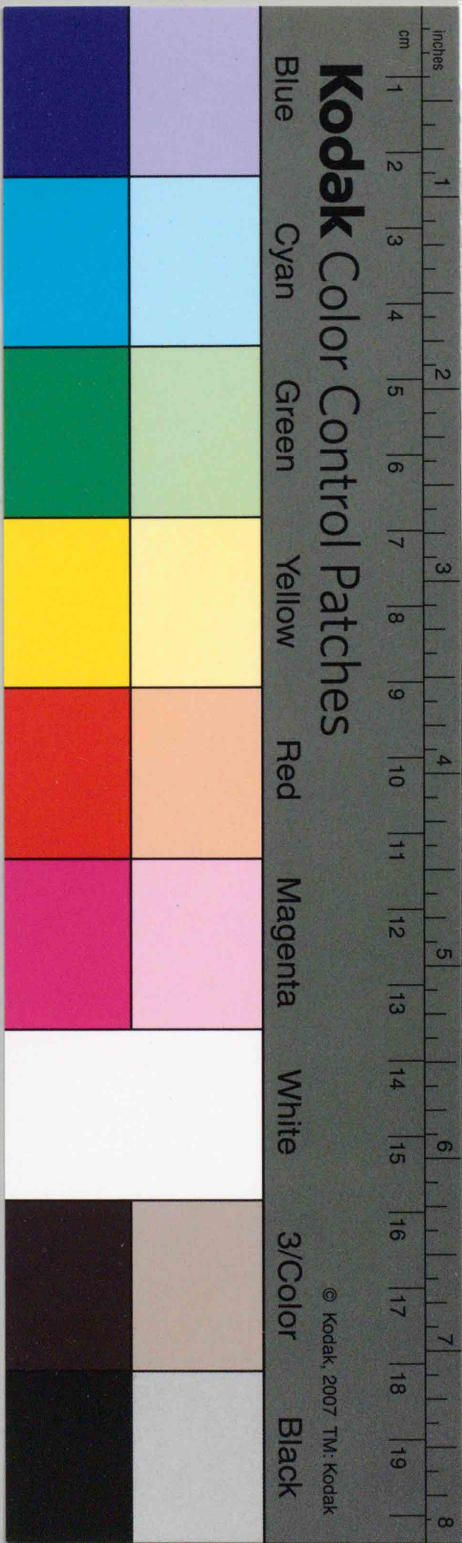


© Kodak, 2007 TM: Kodak

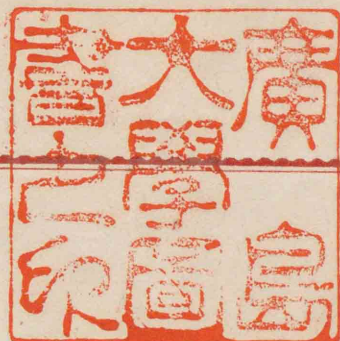
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
0c8



375.9
0c8

中等國語讀本卷四目次

- 一、 松平定信 その一……………一
- 二、 松平定信 その二……………五
- 三、 わが幼時……………一一
- 四、 書籍につきての金言……………一八
- 五、 ブッシュ博士の逸事……………二二
- 六、 著作の刻苦……………二四
- 七、 作文……………三一
- 八、 文字の死活……………三三

中等國語讀本卷四目次

一

九	室鳩巢に與ふる書	三四
一〇	親友	三七
一一	少年作曲家その一	四〇
一二	少年作曲家その二	四四
一三	少年作曲家その三	四七
一四	修業論	五〇
一五	二宮尊徳翁の道話數則	五二
一六	畫家の苦心	五九
一七	帖木兒可汗の畫像	六四
一八	香港	六六

一九	船室の記	七一
二〇	科學應用の進歩	七八
二一	波蘭懷古(新體詩)	八二
二二	豪膽なる一少年	八五
二三	一對の美談	九〇
二四	石狩の昔話	九一
二五	加藤清正	一〇〇
二六	含蓄ある詞づかひ	一〇七
二七	レッシングの比喩談數則	一一〇
二八	快觀と悲觀	一一五

二九、カンニ、トヘルスターンその一……一六
 三〇、カンニ、トヘルスターンその二……二三



中等國語讀本卷四

一、松平定信 その一

白河の城主、松平定信は、從三位中納言右衛門督田安宗武卿の第三子にて、八代の將軍徳川吉宗公の孫なり。幼名を賢丸といひ、後に、樂翁といはれき。七歳のとき、はじめて、假名を習ひ、また、孝經を讀まる。學問の師は、大塚大助といひて、田安家の儒臣なり。この頃より、非凡の人たらしむ風采ありて、遊戯のさまも、すべて

の小兒の如くならず。幼き心にも、みづから奮勵して、行を正しうし、學を勉められければ、十三歳のときは、自教鑑と題せる、小冊子を綴らるゝに至れり。さて、それを父の宗武卿に見せまゐらせられしに、卿も、ふかく喜ばれ、褒美にとて、史記一部を賜ひ、ますます、これを勵されたり。

讀書の間には、弓術、散樂なども好まれしが、兄弟、甚だねほく、かの大塚も、わのれ一人の師傅ならねば、あかぬことにねほして、日夜、諸役人の詰め居る部屋をゆき廻り、さまざまなる物語を聽きて、樂まれたり。か

くて、一旦、聞かれたる事は、いかに、瑣末の事柄にても、能く、心に留められたるには、人々、驚きたりとぞ。一日、後漢書を讀み、陳蕃が、慨然として、天下を廓清する志ありといへるところに至り、覺えず、膝を拍ちて、感歎せられたりといふ。

幼時、性、極めて、急に、少しく、意に飽かぬ事あれば、烈火の如く怒られたり。されば、儒臣の大塚、また、近侍の人々など、百方苦心して、或は、婉曲に諷し、或は、顔を干して直諫せしこと、たびかさなりければ、いたく、みづから、抑遜せられて、遂に、弱冠の頃には、全く、豹變せら

れたり。常に己に克つは、敵に捷つよりもかたし、能く、克己の教に従ふこそ、眞の勇とはいふべけれ」とぞ、いはれし。他日、英名を、天下に布かれしほどなれば、わかき時にても、既に、他にことなるところ、かく、著しかりしにや。

十四歳にて、父の卿に別れ、兄の大藏卿治察に仕へて、敬と悌とを盡されたり。治察卿は、年、なほ、若かりしかど、病多くして、いまだ、世子なかりければ、賢丸を子として、家を嗣がしめむと望まれたり。然るに、柳營にては、はやく、賢丸をして、陸奥白河の城主、松平定邦の

後を繼がしむること、定められぬ。かゝれば、安永四年十一月廿三日、迎へられて、白河侯の八町堀の邸に入り、改めて、登城し、將軍に謁見あり、從五位に叙せられ、上總介に任ぜられぬ。この時より、名を改めて、定信と稱へられたり。

二、松平定信との二

かくて、ものまなびのことに、深く、志されしは、二十歳ばかりの頃にや。朝は、夙に起きて、讀書を勤め、午餐畢れば、また、案に向ひ、申の刻にいたれる後は、師に就

きて、或は、劍法、槍術を學び、或は、弓馬、操銃を習ひ、晚食して後、少しく、閑をとられ、點燈の後、晝間、繙きし諸書を鈔録し、または、稗史、野乘などを讀まる。常に、おもはれけるは、大丈夫、生を、この世にうけし上は、碌々として、瓦礫と共に碎け、草木と共に朽ちなむこと、いと口惜し。せめては、余が、生涯に成さむと誓へること、おもを、筆にだに殘して、家訓ともせむとて、病の間に、筆を執り、或は、侍臣に口授して、筆記せしめ、國本論、修身錄、政事錄などの諸書を著されたり。

天明三年、歳、廿五歳にして、封を襲ぎ、越中守となら

れき。この年は、春の間、暖にして、雨すくなく、四月より霖雨ふり續き、月を亘りて、止まざりければ、夏に至りても、甚だ、冷にして、人々、綿入を用ゐたり。七月には、淺間山焼け出で、焼石、熱湯を押し流し、秋は又、三日三夜、辰巳の風、吹き荒れければ、五穀、野菜、一向に、枯れ果てて、關東八州より、奥羽にかけて、未曾有の饑饉とはなりにけり。

この凶年に際して、封を襲がれしかば、晝夜、心をくらしめて、封内の人民を救はむことをつとめられき。或人、殿は、不運の時に、家を繼ぎ給へるものかな」とい

ひしに、いなさにも候ふまじ。かゝる非常の時にこそ、人の心も、自ら、一新するものなれば、余の志を行はむには、却りて、便よく、不幸中の幸ともいふべきなり」と、答へられぬ。

封をつがれしより、三年の後、天明六年といふに、將軍家治公、薨去ありて、家齊公、軍職をつがれたり。そのはじめに、家治公、田沼父子を用ゐられしより、政事、漸く、紊れ、賄賂、行はれ、阿諛、風をなし、世間の腐敗、かぎりなきに、凶年飢歲、うちつゞき、剩へ、諸國に、疫病流行し、大水、大風、年毎にいたり、安永の元年には、江戸に大火

あり、南は、麻布より、北は、千住まで延焼し、死傷せしもの、數を知らざりき。目黒行人坂の火事といふは、即ち、これなり。されば、上下困窮して、いかにともなすべからざるにいたれり。

かゝるほどに、老中に任ぜられ、幕政を預り聞かれしのみならず、その翌年、將軍、少弱なるにより、輔佐の職にありて、政務を總攬すべしとの命あり。これより、身を以て、幕府に盡し、上は、皇室を尊び奉り、下は、幕府の將に傾かむとするを支へられたるなど、その功、極めて、大なり。

嘗て、海外の兵制に思ふ所やあられけむ、數年、力をこゝに籠められ、各國の諸書より鈔出して、委しく、その圖を録し、詞は、蘭學者をして、和解せしめ、文は、漢學者をして、譯せしめ、遠西軍器考を著述せられしが、果して、文化四年に至り、露西亞の賊、松前、蝦夷にて、亂暴せしことあり。時に、南部、津輕等を始め、奥羽の諸侯、早追を以て、日々、江戸へ注進するなど、その狼狽、一方ならず。さるに、公は、すこしも驚かず、種々、手當をなして、萬一の備をせられしかば、將軍家よりは、奇特なりとて、いたく、賞せられたりとか。その先見のほど、實に、驚

くべきなり。(著者不詳本朝傳記)

三、わが幼時

我が幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは、寛永寺の花見に、人の群れ來る事どもを記せるなり。我が三歳の春の頃、火燧に足をさして、腹ばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めて、透寫しけるを、母人の見給ひて、十の中、一二は、誠の文字もありしかば、我が父に見せ進らせられしを、父の友人の、來り見しより、人々も、聞き傳へて、その寫し、物どもを、取り傳ふ

ことになりたり。その頃、屏風に、我が名を題せしに、二字は、その體をなしたる者の、後までありしが、火に焼け失せたりければ、今は、その頃の物は、我が許には残らず。

この後は、常の戯に、筆執りて、物書く事のみを志ければ、自ら、日々に、文字をも見知りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、只、往來物の類などを讀み習ふのみなりき。戸部の家人に、富田とて、生國は、加賀の國の人と聞えしが、太平記の評判といふことを傳へて、その事を講ずるあり。夜々に、我が父など、寄り合

ひつゝ、その事を講ぜしめられしが、我が四五歳の時、常に、その座に侍りて、これを聽くに、夜、いたく更けぬれど、終に、その座を去りし事もなく、講、畢りぬれば、その義を請ひ問ふことなどもありしを、人々、奇特の事なりといへり。

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しく、文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解き聞かせしに、やがて、誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも誦じ聞かせたりき。この兒、才あり、いかにも、師を擇びて、學ばしめらるべしなど、かの人もいひ

しかど、頑なる昔人等のいひしは、昔より利根、氣根、黄金の三根なくては、學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、猶、幼くして、その氣根の事もはかりがたく、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られずなど、いひあへりしに、我が父も、戸部の御いづくしみによりて、常に、御側を離れまゐらせず、學に入れ、師に従はしめむ事も叶ふべからず。されど、幼より、物書く事をば、戸部も、人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて、物をば、書き習はしめたきものなりとて、わが八歳の秋、戸部の、上總の國に行き給ひ

し後にて、手習ふことを教へられたり。その冬の十二月半に、戸部、歸り給ひしかば、常に、傍に侍ふこともとの如く、明年の秋、又、國に行き給ひし後にて、課を立てられて、日の中には、行草の字三千字、夜に入りて、千字を限りて、書きいだすべしと、命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課、未だ、満たざるに、日暮れむとすること、度々にて、西向なる竹椽の上に、机を持ち出でて、書き終へぬることもあり。又、夜に入りて、手習ふに、睡の催して、堪へ難きに、われに附けられし者と、竊に計りて、水二桶づつ、かの竹椽に汲み置き、いたく、

睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄て、先づ、一桶の水をかぶりて、衣うち着て習ふに、初め、冷なるに、目覺むる心地すれど、去ばし、程經ぬれば、身暖になりて、又々、睡くなりぬ。また、水をかぶること、前の如くして、二たび、水をかぶりぬる程には、大やうは、課をも満てたりき。これ、我が九歳の秋冬の間のことなり。

かゝりし程に、この頃よりは、我が父の、人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、又、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に淨寫して進らすべし」と命ぜられ、命

ぜられし如くに、事を終へしかば、冊になして、戸部に見せ進らす。褒め給ふこと、大方ならず。十三の時よりは、戸部の、人と贈答し給ふほどの文ども、大方は、われに命ぜられき。

又、十一歳の時に、我が父の友なる、關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、われにも、この技、教へられむことを望みしに、わぬし、未だ、幼し、是等の技、學ばむこと、遅からずと、いふ。さこそは、侍るべけれど、太刀使ふこと、少しも、心得ざらむには、刀、脇差、腰にせむこと、誠に、不用のことにや」と、いひしかば、

めぬし

「のたまふところ、誠に、然なり」とて、一つの技を傳へて、習はしめたり。

かゝりし程に、その年、十六になりし者の、われと、藝を試みむといひしかば、木刀を取りて、三度合ひて、三度まで、勝つことを得たり。その後は、常に、かゝる、武藝の事どもを好みて、手習ふことなど、心にも染めずありしかど、物讀む事は、好みければ、我が國の物語、草紙等の類をば、殆ど、見つくせり。(新井白石著折燒柴の記)

四、書籍につきての金言(坪内雄藏譯)

いつにても、憂鬱を遣らむとせば、走りて、汝が書に赴け。彼等は、やがて、汝が心を緊捉し、而して、餘念を、汝が心外に驅逐すべし。彼等は、常に、同じ懇切をもて、汝を待遇すべし。(ラッラル)

書は、人生に、新觀察を與へ、いかに、生活すべきかを、吾人に教ふ。彼等は、悲めるものを慰藉し、頑なるものを譴責し、愚なるものを戒め、賢をして、ますます、賢ならしむ。(ラッラル)

たほよそ、齡三十歳ならざる前に、讀書を好まざるものは、後年に至り、それを領會するに足るほどに、書を

好まむこと

好まむこと、殆ど、かたし。(クラレンドン)
書は、少年の食餌、老年の娛樂、順境には、粧飾となり、
逆境には、庇蔭と、慰諭とを與ふ。家にありては、娛樂た
り、外に出でてても、障碍とならず。夜の伴、旅の伴、僻地の
伴。(シセル)

良友を獲るに次ぎての、最良の獲物は、良書を得る
ことなり。(コールトン)

良書

書に、代るべきものは、なし。書は、無聊、病痾、痛苦の際
に、われを娛ませ、又は、慰撫する友なり。兩大陸の財を
以てしても、書の與ふる利益に、代ふることは、能はざ

獲物

るべし。もし、能ふべくば、各人をして、その家に、若干の
良書をあつめしめ、而して、その身、たよび、家人をして、
その文庫に出入することを得しめよ。いかなる贅澤
を、犠牲としても、こればかりのことは、行ふべきなり。
(チャソニョク)

五、ブッシュ博士の逸事

ブッシュ博士の逸事

ヘッセン國王フィリップ第一世は、賢王のほまれたか
かりし君なり。かねてより、ふかく、その國の文教に心
を委ね給ひしが、遂に、一千五百二十七年を以て、壯大

なる國立大學を、その國都、マールブルグに設立し、使を、四方に派して、あまねく、名高き學者等を、聘せしめられたり。四方の學者ども、王が、禮を厚うし、言を卑うして、迎へらるゝ知遇に感激して、皆、争うて、その招聘に應じたりければ、碩學鴻儒の輩、一時、雲の如く、國都に集れり。

その中に、ウエストハーレンの一貴族なる、ヘルマン、ブッシュとて、博學の名、一世に高き人あり。先頭第一に、マールブルグに到着せしが、先づ、市街のありさまを觀むものをとて、最も、繁華なりといふ、町の方にむか

ひて、そゞろに、歩を移しぬ。ブッシュ博士は、かねてより、國王の學事に志あつきを聞き居たりしかば、今、その招聘に應じて來れる、我にむかひては、市人も、相當の敬禮をなすなるべしと、心の中に思へり。かく、思ひつつ、町より町に、さまよひ行きしが、市民は、たゞ、いそがしげに馳せ違ふのみにて、誰一人、脱帽するものもなかりけり。彼は、いと、不興氣に、わが旅館へ歸り來りしが、やがて、市廳を訪問すべき時となりしかば、金糸の燦爛たる禮服に着換へ、胸には、勳章など、かけつらねて、さて、再び、街頭に出でたり。

さきには、何ともなくて、たゞ行き過ぎし人々、今は、皆、歩を止めて、恭しく、彼の前にすゝみて、敬禮せり。ブツシユは、不快の念、ますます、禁じ難く、僅に、市廳の訪問をすまして、急ぎ旅館に歸り、わが室に入るとひとしく、禮服を脱ぎ棄て、足下に、踐み志だきつゝ、嗚呼、汝は、わが半生の苦學にも、まされる價を有せるか」とて、感慨のあまり、おぼしは、涙に咽びたりとぞ。

六、著作の刻苦

今、茲に、天保十二年辛丑の秋、八月まで、星霜、二十八

年にて、八犬傳稿本、たもひのまゝに、全局を結ぶ。思へば、癸巳の秋なりけり。ある朝、ふと、起き出でけるに、眼見えず。眼鏡の價貴きを厭はず、これかれと、多く、購ひ求めて、掛けかへ、掛けかへ、凌ぎしが、己亥の春に至りては、いよいよ、翳みて、見えずなりたれど、未だ、大尾に至らねば、猶、辛くも、綴りてあり。

かくて、去歳の春までは、本傳の稿本も、もとのごとく、十一行の細字に、ものせしかども、夏にいたりては、只、朦朧として、細字を寫すこと能はねば、これより、五行の大字にあらため、手さぐりにて、やうやく、去歳の

秋九月、本傳第九輯四十五の卷まで、綴り果てにきか
くては、明年四十六の卷以下を、綴り果さむこと、心も
となし。いでや、なほ、かくてある程に、今一卷なりとも、
綴らばやと、たろか心をはげまして、第九輯百七十七
回を、五行、或は、四行の大字に、ものしつるに、字形も、志
どろもどろに、かつ、墨のつゝかぬところありて、讀み
難しといへば、それを、家族に補はせなど志たりしが、
十一月に至りては、恰も、雲霧の中にある如く、又、朧月
夜に立つに似て、一字も、寫すこと、得ならずなりぬ。只、
筆研の、不自由なるのみならず、書畫を見ても、確と、見

えず。わづかに、晝夜を辨じ、東西を知るのみ。いかにと
もせむすべなければ、書案を退け、筆を投げ捨て、歎
息せしこと、たびたびなり。

然るに、今年の春に至りて、われ、又、思ふに、八犬傳は、
今昔、ありがたき大部の本なるに、始ありて、終なくば、
只、見る人の、あかす思はむのみか、書肆のためにも、あ
とあとまで、利を全くしがたくて、遺憾にこそあらめ。
人のために謀りて、忠ならぬは、われも、亦、耻づる所な
り。さればとて、わが孫は、乳臭の心失せず、かつ、武藝を
好める本性なれば、かゝる、幫助になるべくもあらず。

彼が母は、人並に、にじりがきもすなれば、教へて、代寫せさせばやと、漸くに、思ひ返しぬ。

さて、第一百七十七回の中ほどより、代筆せさせて、一字毎に、字を教へ、一句毎に、假名遣を教へたり。婦人は、普通の俗字だも知るは、稀なり。漢字、雅言も知らず、假名遣、てにをはも、辨へず、偏傍も、心得ざるに、只、言語をのみもて教へて寫さする、わが心は、いふべくもあらず。まして、教を承けて、寫す者は、たゞ、夢路をたどるこちにて、困じては、うち泣きなどもすめり。かくて、代寫、一枚に満つれば、讀み返させて、又、教へて、傍訓を寫

さするに、熟字を知らず、また、句讀を心得ねば、讀むも、或は、字を脱し、或は、なき字を添ふ。讀むすら、たやすからざるに、知らず、こゝろえざる事を、口授せられて、書きゆくなれば、そのいたはしと、いふばかりなく、たほえしかど、一二卷、寫させゆく程に、彼も、やうやくに、熟れて、苦心は、じめの如くならず、偏傍なども、やゝ、辨へ知るに至れり。

されど、猶、稿本は、さらなり、畫工の寫本も、わがいふ如く、寫せりや、否や、心もとなきことかぎりなく、ことに、文中に、故事などを引き用ゐむと思ふに、暗記の失

傳説
 あれば、原本をとりいださせて、讀まするに、漢籍は、及ぶべくもあらず。假名交の古書といへども、傍訓なきは、え讀まず。強ひて、讀ますれば、馱舌侏離にて、要をなさず。書かする事は、教へもすれど、讀まする事は、わが見るにあらざれば、いよいよ、難儀なり。さはいへ、教誨を受くる者の、困じながらも、あくまで、よく、勉めしにあらざれば、いかでか、この十卷を綴り果して、局を結ぶにいたらむ。縫刺の技、薪炊の事などこそ、彼が職分なれ、文墨風流の事に代らせて、その要をなさむと欲するは、理なきこと、知りつゝも、月を累ねて、こゝに、

辛丑の秋、八月廿日といふ日に、本傳の大團圓まで、漸く、稿し果てたり。(瀧澤馬琴著里見八犬傳抄録)

七、 作文

文を作らむと思はゞ、まづ、題に對して、主意を立つべし。これ、一篇の文字の種子なり。主意、すでに、出來たらば、首は、何といひ起し、中にて、何といひ廣げ、尾にては、何といひ收むべしと、首、中、尾の分段を、布置すべし。これにて、一篇の體、立つなり。分段、すでに、定らば、筆をとりて、心にまかせて、さらさらと、書き立つべし。この

場にて、苦思澁滯すべからず。苦思澁滯せば、一篇の氣脈貫通せず、章段支離して、體をなさざらむ。故に、書きたてたる上にて、ひたすら、修辭潤色し、つとめて、卑俚の語を除き、典雅の辭を擇び、また、繁冗なる處を、點檢して、十字二十字の句を、五字七字にもつとめ、五百字七百字の篇を、二百字三百字にもつとむべし。古文は、辭簡潔にして、義理深長なるを貴ぶ。支那の文も、宋元の文は、冗長なり。試に、古文の辭を以て、つとめて見よ。いかほども、つとめ得らるべきなり。(山縣周南著作文初問)

八、文字の死活

書札の文字にも、死活あり。たとへば、一筆啓上仕り候ふより、御無事、御堅固云々、私宅、恙なく、時候御自愛、猶、後音を期す、云々は、書くも、書かざるも、な程の事もなきなり。さるを、この間の寒氣は、我が郷は、海濱に氷を見、或は、半月一月の早なるに、餘所には、夕立すれども、こゝには降らずなどいへば、同じ寒暖を叙ぶるにも、その地の氣色も想ひやられて、書狀の文字を活すなり。月日の末に、この書、認めたる時は、雨、志きりに降り、杜鵑、二聲三聲、音づれぬなど、書きたるは、いよいよ

よ、その時、その人の姿も、思はるゝやうにて、たもしろし。長さ三尋あまりある書札にても、死にたるあり。三行四行の書にても、活きたるあり。注意すべきことにや。(菅茶山著筆のすさび)

九、室鳩巢に與ふる書

昨日の御報、拜誦、驚愕、是非に及ばず候ふ。然りといへども、火急の處に、御全家、御異状なきことを、この上の多幸と思し召さるべく候ふ。但し、をしむべきことは、多年、御拮据候うて、御求め得し御書籍と、御手録と

たのしみしたるもの

の事、承り候ふだに、心を苦め候ふ。これも、身より外のもの、是非に及ばず候ふ。貴兄、既に、御學業も成就候へば、これより後、書籍をたのみて、たのまぬことに候ふ。令郎、いまだ、御學問、未成業の御ことに候へば、せめて、書籍をば、御殘し候ふ御はからひの事、あながちに、俗輩、買田問舎等の事に比すべからず候ふ。某家藏の書もとより、多からず候へども、二重になり候ふもの、少少、これあり候ふ。書目の簿も、なにもの中にやらむ、入れなき候ふ故、昨夜、尋ね候へども、知れず候ふ。されど、覺え候ふ處は、監本四書、茅鹿門史記、漢書など、これあり

白紙の書物

候ふ。即ち、令郎へ、これを進ずべく候ふ。この外の書、恩賜のもの、外は、なに、とても、御用次第、御貸し申すべく候ふ。御事もかゝせらるまじく候ふ。この節も、手前の事、御物語申し候ひし如く、十分なる御用には、たち候はねども、いさゝか位は、恩賜のもの、なほ、これあるべく候ふ。御心ねきなく、仰せ下さるべく候ふ。廉潔をたて候ふも、事にもより、相手にもより候ふ。尋常同門も、兄弟の親に同じく候ふ。況や、たゞに、同門と申すばかりにもこれなく、秦風與子同袍（秦風與子同袍）と申すは、この事に候ふ。仰せ下さるゝすこしも、すこしも、御はづかしか

るべき事にもなく候ふ。早々。（新井白石自筆書簡寫）

一〇、親友

昔、某國に、某人あり。その子某齡、既に、立志に及べり。一日、父に向ひ、兒、既に、長じたれば、今より、自立の道を講ぜざるべからず。然れども、兒、猶、經驗に乏し。さては、櫛風沐雨、各地を跋渉して、親しく、世事の辛酸甘澁を味はむと思へり。この事、許させ給へ」と、乞ふ。その父、汝の志、まことによし。一日も、はやく、出て立て。たゞ、將來、身を立て、家を興さむと思はゞ、先づ、朋友を求めよ。こ

れ、處世の一大要訣なるぞ」と、誠む。こゝに、旅装を調へ、去りて、周遊すること、期年にして歸れり。父、喜び迎へて、汝、朋友を得たるかと問ふに、然り、父君の教のまゝに、到るところに、親友を求め得たり」と答へつゝ、指を屈して、某の地、某の處の、某々を數ふ。父、感然として、憂色を帶び、人心、變じ易く、親友、得難し。今、汝の得たる朋友、果して、眞なりや、否や、余、今より、これを試みむとて、飼ふところの豚を屠り、鮮血淋漓たる肉を、囊に盛り、その子に、これを負はしめ、まづ、その親友といふ一人の家に到り、事あり、君を煩さむ。わが父、人を殺し、將に、

逮捕せられむとす。請ふ、庇護せよ」と、告げしむ。その人、顧みて、他をいひ、請を容れず。乃ち、去りて、また、他に行き、所謂、親友を歴訪して、前言を反覆せしめしかど、一友の、身を挺し、心を傾けて、その難を救はむとするものあるを見ず。こゝに、父、その子にむかひ、見よ、汝、今日、はじめて、人心の、知り難く、親友の、得易からざるを悟りしならむ。更に、今より、余の親友を訪ひて、その眞なりや、否やを試みるべしとて、この度は、自ら、その囊を負ひ、馳せて、一親友の門に到り、拙兒、人を殺し、難、測られざるにあり。君、願くは、これを救へ」と、いひしに、主人、

錯愕、措くところを知らず、急遽、門を開き、二人を、後堂に誘ひ入れ、まづ、志ばし、こゝにあれ。徐に、謀るところあるべし」といふ。こゝに、父、その子を顧みて、汝、知れりや、わが所謂、親友は、かくの如きのみ」といふに、子は、はじめ、父の誠の言の味あるを悟れり。さて、實をもて、この親友に告げしに、その友、大に、心を安め、かの負ふところの豚を煮て、共に、祝杯を擧げたりといふ。千頭

清臣文稿臨淵言行錄抄錄

一一、少年作曲家その一

倫敦の貧民窟と呼ばれたる、町はづれの、あやしげなる破家の一間に、母と共に住める、一少年あり。名を、ピールといふ。もとより、貧しきが上に、母は、長く、病床にありて、起臥も、自由ならず、わが身は、まだ、幼くて、何の職業に就かむよしもなかりければ、家道、日に、衰へゆきて、今は、いかにともすること能はざるに至れり。されど、ピールは、これを、苦しと思はず、まめやかに、母の看護を怠らで、ひたすら、その快復を祈りてあり。今日は、はや、一錢の貯もなくなりぬ。ピールは、朝より、一片のパンをも味はで、母の側にあり。病、少し、ひま

ありと見えて、母は、今、安き眠に入りぬ。ふと見れば、枕頭の薬、既に、盡きたり。わが飢は、ともかくも、母に進むべき薬をいかにせむと思へば、ピールは、いよいよ、心細さのといふ難きを覚えぬ。

ピールは、涙ぐみながら、立ち上りて、窓に倚りつゝ、外面の方を眺め居たりしが、やがて、かまたより、旗さし上げ、喇叭、太鼓を囃し立てつゝ、音樂會の廣告を、ふれ來るものあり。聞けば、マリブラン女史といふ、當代に名高き唱歌師の、今宵、さる處にて、新曲を歌ふべしといふ、廣告なりけり。

こゝに、ピールは、ふと、去年マリブラン女史の歌ひし、ある小歌の一枚摺が、何萬枚ともなく、賣れ行きしことを、思ひ浮べぬ。ピールは、物心のつきし頃より、はやくも、音樂のたのしみを覚えて、はては、何とも分かぬ小歌など、折々、作り出でたることもありしが、この頃も、母の病床に侍して、看護のかたはら、一の小歌を作りいだせり。ピールは、今、その小歌を見つゝ、あはれ、もしも、これを、かの女史の歌ひくれなば、争ひて、書肆の買ふ所ともならむ。かくならば、母の薬も、心にまかせ、われも、また、飢を醫することを得む。女史には、もと

より、一面の識もなければ、ひたすらに、請ひ願はゞ、な
どか許されぬことのなからむと、思ひせまりては、子
供氣の中々に、とゞめむよしもなく、急ぎ、筆を走らせ
て、わが小歌を書き改め、やすらかに、眠れる母に、黙禮
しつゝ、街頭に出て行きぬ。

一二、少年作曲家その二

マリブラン女史は、とあるホテルの一室に憩ひつ
つありしが、見も知らぬ幼童の、訪れ來て、刺を通ずる
あり。見るから愛らしき、十歳ばかりなる幼童は、憶す

る色もなく、靜に、女史の前に進みて、一禮せり。かくて、
彼は、ほがらかなる聲にて、わが母は、久しく、病みわづ
らひて、今は、薬を買ふべき錢すらも盡きぬ。この、はか
なきわれらを、憐み給はゞ、願くは、御身、この歌を歌う
て給はらずや。さすれば、われは、書肆に頼み、一枚摺と
なして、それを、賣りあるかむと思へり」とて、一枚の紙の、
巻きたるを出しぬ。

女史は、そと、そを取り上げて、黙讀し居たりしが、や
がて、驚けるれも、ちにて、ビールの顔を、うちながめ、
「こを、そなたは、作れりとや」と、いひぬ。さて、幾度か讀み

かへしつゝ、こは、まことに、美事なる作なり。わらはは、今宵、必ず、こを歌ふべし。そなたも來りて、わらはの歌ふを聞かれよ」と、いへば、ビールは、うなだれて、そは、うれしけれど、母の一人にてあらむが、いとほしくて、といふ。母君の方へは、わらはより、ものなれたる看護婦を送るべし。心れきなく來よ」とて、女史は、なにくれと、勞り慰め、若干の金子と、音樂會の入場券とを與へしに、ビールは、夢かとはかり、うち喜び、母にさゝぐべき、藥、食物など買ひ集めて、家に歸りぬ。

一三、少年作曲家との三

今日の事どもを、母と語らふほどに、やがて、看護婦も來りしかば、ビールは、音樂會へと急ぎぬ。まばゆきばかりに、みがき上げたる舞臺に、金糸の幔幕、張り渡したるが、さまざまなる電燈の光に輝きて、その間に立ち雜れる、人々の衣服の上に反映せるなど、かゝることに眼なれぬ。ビールは、たゞ、驚くより外のこともなし。

幕の開くとひとしく、賑なる奏樂、始れり。數番の演奏、終りし後、マリブラン女史は、拍手の聲に迎へられ

て、靜に、場に上りぬ。ピールは、思はず、慄ひ始めぬ。女史は、一禮して、徐に、歌ひ出せり。そは、まことに、ピールの歌なりけり。高く、低く、緩く、急ヒキく、あはれに移りゆく、唱歌の曲のゆかしさ、満場、さながら、水を打てるが如く、聽衆の眼には、いつか、涙浮びぬ。曲は、終れり。満場、なほ、寂として、人なきが如し。やがて、拍手の聲、雷の如く起れり。

ピールは、會場を出でて、家路に向ひしが、たゞ、空ゆく心ちして、踏む足すらも、さだかならず。一時は、書肆の事をも、思ひ浮べねば、又、母の事をも、うち忘れたり。

あまりのうれしさに。

翌朝、マリブラン女史は、ピールの家を訪れ來ぬ。昨夜の歌をば、ある書肆の、三百磅に買ひたりとて、その金子を、悉く、與へぬ。母は、たゞ、涙の外に、謝することばもなかりき。

ピールは、長ずるに従ひて、益、作曲の妙を得、後、遂に、名高き作曲家となれり。マリブラン女史の、倫敦にて病死せしをり、絶えず、その枕邊にありて、兄弟も及ばぬ看護をつくし、は、このピールにてありきとか。

一四、修業論

何事によらず、業に就きては、怠るべからず。成効は、急ぐべからず。唯、常に、心を、こゝに存すべし。成効に急なれば、退屈の念生じて、事遂げ難く、業に就きて怠らざれば、面白み、その間に生じて、成効の全きを致すべし。學問の道は、事業の中にも、最も、難きものなれば、最も、このところに、心得なくばあるべからず。然るに、學生の常として、はじめのほどは、随分能く、勉強すれども、やうやくにして、退屈の念を生じ、その甚しきは、終に、廢學するにも至る者あるは、畢竟、成効を望むこと、

急なるによれり。大工左官の如き、卑近の業すら、猶、かつ、數年の年季を入れて、これを修むるにあらざれば、その大工なり、左官なり、一人前の職工とはなる事を得ざるにあらずや。まして、人の人たる道を修め、士大夫の師表たるべき學問の道にして、最も、容易に、成就すべきものならむや。

元來、人の精力は、かぎりあるものなれば、非常に、勉強するは、かへりて、非常の怠を生ずる本ともなるべし。非常の勉強を要せず、眠食、常を失ふことなく、職ある者は、職に従ひ、産業あるものは、産業を治め、さて後、暫

時にても、暇ある時、心を專一にして、修業すべし。朝に温めて、夕に冷すことなかれ。昨は勤めて、今は怠ることなかれ。かくのごとくにして、日々に變ずることなく、月を累ね、年を積み、て、やまざらむには、餘業に學ぶ者といへども、成學の効驗、かならず、見るべきなり。事業中、最も、難しとする學問の道にして、既に、然り。然らば、その他のごとき、この心得を以て、勉むるに於ては、何事をかなし果さざらむ。（松本直秀著 琴園叢錄）

一五、二宮尊徳翁の道話數則

人道は、たとへば、水車の如し。その形、半分は、水流に順ひ、半分は、水流に逆ひて、輪轉す。全く、水中に沈めなば、廻らずして、流るべく、全く、水を離れなば、めぐるところあるべからず。かの、佛家にいふところの、智識の如く、世をはなれ、欲を捨てたるは、たとへば、水車の、全く、水を離れたるが如し。また、凡俗の、教義もきかず、義務も知らず、私欲一偏に着するは、水車を、全く、水中に沈めたるが如し。共に、社會の用をなさず。故に、人道は、中庸を貴ぶ。水車の中庸は、よろしきほどに、水中に入りて、半分は、水に順ひ、半分は、流水を出でて、輪轉、滯らざ

るにあり。人の道も、その如く、天理に順ひて、種を蒔き、天理に逆ひて、草を取り、欲に隨ひて、家業をはげみ、欲を制して、義務を思ふべきなり。

世の人、刃物をとりにやりするに、必ず、刃の方を、わが方へ向け、柄の方を、人の方にして出すを例とせり。それ、刃の方をわが方にして、先方に向けざるは、萬一、過ある時、わが身には、疵をつくとも、人には、疵をつけざらむとの意なり。かくの如く、わが身の上をば損ずとも、他の身の上には、損はかけじ、わが名譽は損ずとも、他の名譽には、疵をつけじといふは、これ、やがて、道徳

の本意なり。これよりさきは、たゞ、この心をひろむるにあるのみ。

暴風に倒れし松は、雨露入りて、すてに、倒れむとするところの松なり。大風に破れし籬は、杭朽ち、繩くされて、將に、破れむとするところの籬なり。それ、風は、平等均一に、吹くものにして、松を倒さむとて、殊更に、吹くにあらず、籬を破らむとて、わきて、吹くにあざれば、風なくとも、倒るべきを、たまたま、風を待ちて、倒れもし、破れもしたるなり。天下の事、みな、然り。

家屋のことを、俗に、屋船といふは、たもしろき俗言

なり。家をば、實に、船と心得べし。これを、船とする時は、主人は、船頭なり。一家のものは、みな、乗合なり。世の中は、大海なり。されば、この屋船に事あるも、又、世の大海に事あるも、この災は、共に、遁れざるものなれば、船頭は、勿論、乗合の人々は、一心協力、この屋船を維持せざるべからず。さて、この屋船を維持するには、楫のとりやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが、専務なり。この二つに、よく、氣をつくれれば、屋船の維持、疑なし。然るに、楫のとりやうにも、心を用ゐず、船に穴あきても、ふさがむともせず、主人は、働かずして、酒を呑み、

妻は、遊藝を樂み、悴は、碁將碁に耽り、安閑として、歲月をれくり、終に、屋船をして、沈没するに至らしむ。嘆息のいたりならずや。

松明つきて、手に、火の近づく時は、速に、捨つべし。火事ありて、危き時は、荷物は捨て、逃げいだすべし。船くつがへらむとせば、上荷をはぬべく、甚しき時は、帆柱をも伐るべし。この理を知らざるを、至愚といふ。

世上一般、貧富苦樂といひさわけども、世上は、大海の如くなれば、是非なし。たゞ、水を泳ぐ術の、上手と下手とのみ。舟を浮べて、用便する水も、舟を覆へされて、

溺死する水も、水にかはりはあらず。たゞ、時によりて、風に、順風あり、逆風あり、海に、荒き時あり、穩なる時あるのみ。されば、溺死をまぬがるゝは、泳の術、一つなり。世の海を、穩に渡る術は、勤と儉と讓との三つのみ。

山芋掘は、山芋の蔓を見て、芋のよきとあしきとを知り、鰻釣は、泥土の様子を見て、鰻の居ると居らざるとを知り、良農は、草の色を見て、土の肥えたと痩せたとを知り、みな、わざ。こは、所謂、至誠、神の如しといふものにして、永年、刻苦經驗して、發明せるものなり。技藝に、このこと多し。あなどるべからず。(福住正兄著)

二宮尊徳翁夜話

一六、畫家の苦心

泉州堺に、一國寺といふ精舎あり。この寺は、千の利休も、志ばらく、居しところにて、物好を盡したる座敷、五間ほどもあり。一間には、檜の樹一本をゑがけり。一間には、臥したる鶴、二十五羽ばかりゑがきて、いづれも、彩色ありて、古法眼元信の筆と、いひ傳へたり。

そのかみ、この繪をかける畫師、この寺に寓居せしが、何ひとつ畫くといふこともなく、日毎、碁にのみ耽

りて、はやく、三年を経たり。住持は、いかにも、心得ざる者かなと思ひて、ある時、その許、畫をもて、一家をなせりといひながら、筆を執りたることもなく、圍碁にのみ、年月をすごさるゝはいかに。われ、衣食の費を厭ふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。愚老も、所用ありて、京へのぼり、ことによりては、一二年在京せむもはかりがたしと、いふに、彼の畫師、聞きて、それこそ、いと、名殘をしきことに候へ。さあらば、年來の謝恩に、何か、少しの畫を殘しまるらすべしとて、その心がまへせしが、又、筆もとらて、四五日ほど經ぬ。住持は、怪み

てありしに、ある夜、小坊主來て、竊に、いふやう、かしこに行き給ひて、畫師の有様を覗き見給へ」と、いへば、行き見るに、明障子の腰板に、身をよせて、さまざまに姿をかへつゝ、寢起する有様なり。こゝに、さまたげなさむも、心なしと思ひて、そと、寢間にかへりぬ。

あくる朝、畫師、まだきに起きいて、一間なる障子にゑがけり。見れば、皆、臥したる鶴なり。畫勢、不凡にして、丹青の妙、いふべからず。かくて、又の夜は、如何と窺ふに、前の如く、夜もすがら、寢ずして、あけなば、かくや畫かむとやせむ、かくやあらましなど、ひとりつぶやき

つゝあれば、住持は知らぬ顔して、すごしゝに、十日を
まりにして、その鶴、およそ廿四五羽をゑがけり。また
も、夜ふけて、覗き見るに、こたひは、肘を張り、足を伸べ、
手を口にあてつゝ、鶴の臥したるさまをなせり。さて、
夜あけて、畫師がもとに行き、今日ゑがき給はむ鶴の
姿は、かやうにやあらむ」と、よべ覗き見たる姿のさま
して見せければ、畫師は、うち驚き、住持には、わが畫か
むと思ひかまへし心を、いかにして、悟り知り給へる
にか」と問ふに、いやとよ、昨夜、そのもとの有様を、そと、
窺ひて知りたり」と、いへば、畫師、それよりして、二枚は、

ゑがかずして、杉戸の畫に、檜の樹一本をゑがきて、東
國へと、いで立ちぬ。

さるに、東海道箱根の山中にて、檜の樹の枝の、心に
かなひたるがありければ、東國へは下らずして、再び、
一國寺へ立ちかへりしに、住持見て、大に驚き、東國へ
行き給ふと聞きしに、又もや來られしは、いかなるこ
とにか」と、いふに、先に畫きし檜の樹の枝、ひと枝、足ら
ぬところあり。箱根にて、その意を得たれば、わざわざ、
立ちもどりたり」とて、一枝を書き添へ、いとまごひし
て、再び、出で去れりとなむ。(柳澤淇園著雲萍雜誌)

一七、帖木兒可汗の畫像

今より五百年餘の昔、蒙古に生れ、亞細亞の國々を討ち從へ、歐羅巴まで攻め入りて、武名を、後世に残し、帖木兒可汗といへる人あり。その性、極めてはげしく、心にかなはぬ事あれば、いかなる人なりとも、それを斬り殺すこと、草木の枝を折る如くなれば、人々、虎狼の如く、畏ち怖れて、その命に反く者もあらず。

可汗は、心の勝れて、烈しきさまの、その面にあらはれ、いと醜き人にして、殊に、片目は眇なり。或時、名ある

繪師を召して、己が像を寫せよ」と命じたるに、その繪師、思ふやう、その像を、ありの儘に寫さむは、いといたやすけれど、その醜きさまを、そのまま書かば、いかなる罪をかうけむ。さりとして、似ざる像をかきなば、拙しとして、中々に、怒や招かむと、困じはて、志ばしは、筆をも執らず。

かくて、種々、思ひ考へ、漸く、心に悟れる所ありて、俄に、心を興して、寫し出せる繪のさまは、可汗が、眞弓の直中を握り、眇なる方の眼を閉ぢ、月の輪の如く、弓弦、ひきまぼりつゝ、狙ひすまして、射立てむとする所に

して、その勢のたけだけしき、喩ふべくもあらず。可汗、これを見て、非常に、うち喜び、若干の引出物取らせて、あつく、賞めはやせりとぞ。

あはれ、この繪師よ、その技に、いたり深く、その心、さとからずば、いかで、虎狼の牙にかゝらむ禍を轉じて、こよなき福となすことを得む。その醜き所をかくして、眞の狀を、ありのまゝに、かき現し、は、かへすがへすも、めでたき思慮といふべくや。(篤齋隨筆)

一八、香港

香港は、周回二十三哩許の島嶼にして、かの阿片の亂に、英國の所領となりしより、年をわひて、隆昌に赴き、昔は、不毛人跡の絶えたる一孤島なりしも、今は、人口二十萬ばかりにいたれり。四面の岡陵は、見渡すかぎり、種々の樹木を植ゑつらね、道路、縦横に開け、溝梁、東西に通じ、當面の山頂には、英國の國旗をかゝげ、一門の巨砲を備へたり。これは、各國軍艦の出入するごとくに、發砲して、四方に報ずるなり。市街各所に、製造所、甚だ、たほく、人口は、上海よりもすくなしといへども、煙筒の數は、殆ど、三倍もあらむか。これ等の工場は、悉

く、洋人の所有のみにもあらずして、まゝ、清人の所有に係るものもあり。

余の、この港に着せしは、十二月の初なりしが、この時、なほ、寒暖計は、七十四五度にして、漸く、熱帯に近づきたるを覺えき。余は、山縣伯と共に、ケーブルカーに乗じて、市街の西北、即ち、港の背後なる一山に登れり。このケーブルカーといふものは、蒸氣仕掛により、鐵鎖にて、車を引き、鐵道を、上下するものにして、米國桑港の市街などには、最も、多く、架設しあり。高處に、昇降するには、至極、便利なるものなり。山頂には、氣象臺、及

び、數多の洋館あり。四面、風景の絶佳なる、えもいはれず。遠くは、廣東邊の諸山を望み、近くは、脚下に、香港灣を控へ、志かのみならず、空氣清潔、涼風、徐に來るなど、ことに、精神の爽快を覺ゆ。

本港には、英國の兵營あり。常に、幾隊の軍兵を備へ、又、巡查も、數多、配置しあり。而して、支那人群集の街には、支那人を雇ひ、支那服にて、たゞ、帽のみ一定せり。その他の場所は、大概、印度人を用ゐる居るが、いづれも、よく、訓練したるものと見えて、保安取締も、よく、行き届きたり。又、造船所も、當時、築造中の由、その他、砂糖製造

所等をはじめ、各種の工場續々起るなど、その進歩のさま直に、上海を駕する勢ありて、僅々、三四十年前に開けたる地とは、思はれざるほどなり。余は、この地を一見して、英國、近きにありといふ感を起したり。過日、渡邊書記官に、この事を話し、に、同氏も、同感にて、洋行して、香港に至るものは、みな、この感情を起すといへり。

余、又、この地の事情を見聞して、一つの疑を起せることあり。かの波蘭の、露西亞にわける、アルサス、ローレンスの、獨逸にわけるが如き、いづれも、その人民が、

その政府に心服せざる有様は、かの所謂、周の頑民は、殷の忠臣なり」とも、いはむか。波蘭のごとき、露國が、その國語をさへ禁制して、教育上より、心服を得むとするにもかゝ、はらず、をりを得ば、崛起せむとする民心は、中々、消磨しつきずして、例の虚無黨騒も、波蘭人より出づるもの多しと、聞きけるを、この地にわける支那人は、全く、さる情況も見えず。古來、孔孟忠孝の教に凝り固りたる人民にも似ず、今は、敵國仇讐の念慮など、一毫も、なきものゝ如し。只、時々、同盟罷工等のことはあれども、これは、決して、國家的感情より來るには

あらず。余は、支那が、その古來、己が領地たりしもの、今は、英國の所有となり、己が臣民たりしもの、亦、英國の民となり、英國が、その地を利用し、その民を使役して、盛に、工業を興し、匡利を占むる有様を見ては、なにとなく、氣の毒に堪へざるなり。(船越松窓著松窓夜話)

一九、船室の記

わが乗れる船は、六層より成れり。第一層は、甲板にして、この中に、書籍室、及び、喫烟室あり。第二層、第三層は、客室なり。食堂は、第三層の中にあり。湯殿、化粧室、こ

れに添ふ。それより以下は、下等船客、及び、荷物庫なり。第一層の上に、更に、船橋を設く。こゝは、機關師の外は、上ることを許さず。

書籍室は、船の前方にあり。凡そ、二十疊を敷くべし。目錄を備へて、自在に、閱覽する便を與ふ。椅子、テーブルは、行儀よく、ならべありて、自由に、これを使用することを得るのみならず、インキ、鐵筆、用紙、狀袋をさへ備へあり。その他、新聞雜誌も備へありて、居ながら、歐米各國の近狀も知らるゝなど、一たび、こゝに入り、讀書に、心をこむる時は、われながら、洋上の旅客たるを

忘らるゝなり。

喫烟室は、船の後方にあり。これも、凡そ、十四五疊を敷くべし。いづこにも、落機山の額を掲げたり。蓋し、この線路の一斑を示せるなるべし。椅子、テーブルは、例に依りて、なればられたれば、以て、トランプをなすべく、以て、將棊をさすべく、以て、酒を飲むべく、以て、烟草をくゆらすべし。

客室は、廣きは、十疊より、八疊ばかり、狭きは、六疊ばかり、二人、若くは、三人を容るべし。寢臺は、壁に倚りて、附けられ、底を、鐵網にて張り、下に、藁蒲團を敷き、更に、

毛布數枚を重ねて、これを蓋ふ。鏡臺、手洗鉢、二人を容るゝ處には、必ず、二臺を備へ、三人を容るゝ處には、必ず、三臺を備ふ。又、テーブルあり。腰掛あり。箆筒あり。朝起き出でて、手洗ひ、口嗽ぎ、鏡に向ひて、容貌を整へ、外に出づるほどに、支那人のボーイ、必ず、來りて、その跡を掃除し、夜具の如きは、昨夜のと改められたり、その清潔なる、いふばかりなし。

食堂は、廣さ、百疊をも敷くべし。食卓、椅子、正しく、並びたり。食事毎に、支那人のボーイ、客に、活版に摺りたてたる獻立書を渡す。その種類、凡そ、三十品内外なり。

客は、好に依りて、それぞれ申し付くるに、忽ち、その品を運び來るなど、その迅速なる、わどろくに堪へたり。船體、やゝ、動搖するも、ボーイは、巧に歩き、スープ、ポミネー等を持ち運ぶに、すこしも、過つことなし。この室の奥には、美麗なる、ピアノを備へたり。時ありて、これを弾じ、衆客の愁を慰めしむ。

湯殿は、化粧室と相隣せり。湯桶は、大理石にて、船形なり。水、或は、湯と記しある栓を引けば、わが思ふまゝの加減に、たゞ、ふることを得べし。浴し了ふれば、底の方より、流れ去るやうにす。

化粧室も、こゝに並びて、大理石の間に、水盥を、數多入れこみたり。例の向より出でたる、小さき栓をひねれば、水は、迸り出でて、見るまに、盥に満つ。また、洋銀にて製せる筒のごときもの、盥の上ごとに、必ず、さし出でたり。これは、石鹼を粉にまたるものにて、拇指にて、その小さく出でたる處を押せば、さらさらと出づるを、手に受け、やがて、水に和して、洗ふやうにせり。

船中、寒ければ、暖爐を用ゐて、冬あるを忘れしむべく、暑ければ、小幕やうのものゝ、網附けたるを、天井より下げ、それを動して、夏あるを忘れしむ。嗚呼、文明的

航海の業も、こゝに至りて、極れるか。余は、これを船といはむより、むしろ、太平洋上の極樂國といはむとす。歐米人の旅行を以て、快樂の一に數ふるも、宜ならずや。(池邊義象著佛國風俗問答)

二〇、科學應用の進歩

東洋より、西洋に遊びて、雙方の優劣を比較するに、西洋の遙に、東洋より優れりとれば、ゆるは、器械道具を用ゐる事の、廣きと、これに關する科學の、進歩し居るとにあり。

海上の汽船、陸上の汽車、電信、電話機等は、勿論、目に觸るゝもの、すべて、道具仕掛ならざるはなし。手を働しても、不便なき細事すら、猶、道具を用ゐる居るなり。例へば、牛肉を、細に、摺りきざむにも、道具を用ゐる、庖丁を磨くにも、道具を用ゐる、奴婢を呼ぶにも、道具を用ゐるが如し。

又、足癩乞食の乗る車にても、その器械は、東洋の足癩車よりは、入り組みたり。また、門附乞食の如きも、大抵は、皆、奏樂の器械を携帶せり。又、切物磨の商人の如きも、磨器械を、小車に仕掛けて、街上を徘徊せり。萬事、

みな、かくの如く、東洋人の目に、一見して、たちまち、西洋の優れりと覺ゆるものは、器械道具の世界なり。いひ換ふれば、科學世界の進歩なり。

東洋諸國が、西洋諸國に壓せらるゝは、第一に、戦争なれども、その西洋人が強しといふも、兵士の勇怯にあらずして、むしろ、遠方より、巧に、鐵塊をとばし、或は、爆裂藥の力を借りて、敵を破るに外ならず。すなはち、器械道具を以て、勝を得るものなり。又、西洋人は、東洋人よりも、商業に手廣しといふも、たゞ、これ、荷物の運漕に、汽車、汽船等を用ゐて、自在に、世界を往來し、又、電

信などを以て、通信を自在にし、甲地の廉なる物を、乙地に賣り込み、乙地の廉なる品を、甲地に賣り込む等の働に外ならず。この働をなさしむるものは、すなはち、また、器械道具の方なり。

また、西洋の物品は、東洋の物品よりも精巧にして、廉價なりといふも、器械を用ゐて、人力を省くが故なり。粗大なる鐵細工より、微妙なる金銀の細工、木石の彫刻等に至るまで、悉く、みな、それぞれの器械道具ありて、容易く、これを製造するなり。

されば、西洋文明の東洋に優れるところは、戦争に

あれ、商業にあれ、工業にあれ、みな、これ、器械道具の世
界より生じたるものにして、その優劣は、器械道具世
界の優劣、すなはち、科學の進歩不進歩によるといひ
て可ならむ。(矢野文雄著周遊雜記)

二一、波蘭懷古 (騎馬旅行の一節)

ひと日ふた日は、晴れたれど、
三日四日五日は、雨に風、
路のあしさに、のる駒も、
ふみわづらひぬ、野路山路。

雪こそふらぬ、さえかへる、
嵐やいかたに、さむからむ、
こほりはりたり、このあした、
れく霜あろし、このゆふべ、
獨逸の國も、ゆきすぎて、
露西亞の境に、いりにしが、
さむさはいよ、まさりつゝ、
ふらぬ日もなし、雪あられ、
さびしき里に、いてたれば、
こゝはいづこと、たづねしに、

聞くもあはれや、	そのむかし、
ほろぼされたる、	ポーランド、
かしこに見ゆる、	城のあと、
こゝにのこれる、	石の垣、
てらす夕日は、	色さむく、
飛ぶもさびしや、	鵬鳩の影、
榮枯盛衰	世のならひ、
そのことわりは、	知れども、
かくまで荒るゝ、	ものとしも、
たれかは知らむ、	夢にだに、

存亡興廢

世のならひ、

そのことわりを、	うたがはむ、
人はひとたび、	來ても見よ、
あはれはかなき、	このところ、
さきて榮えし、	いにしへの、
色よにほひよ、	今いつこ、
花のみやこの、	その春も、
まこと一時の、	夢にして

一一一、豪膽なる一少年

嘗て、羅馬國人の、エトラスカ國王ポルセナと、兵を構へし時、羅馬の軍、志きりに、利あらずして、その國都、遂に、敵軍の圍む所となれり。かくて、重圍の中に、數月を經過したりければ、城中、今は、飢渴イカツの苦に堪へずなりぬ。

その折、城中に、マチアスといふ一少年の、極めて、豪膽なるがありけり。祖國の運命、今、旦夕に迫れるを見て、深く、心に決する所あり。ある夜、ひそかに、城を出て、敵陣に紛れ入り、いかにもして、ポルセナ王を刺し殺さむと、様々に、心を碎けり。幸にして、敵兵の眼を忍

びつゝ、彼は、漸く、王の幕中に入りぬ。されど、ポルセナ王を知らざりしこの少年は、いづれを王と、見わかむ由もなかりしかば、暫時の程は、躊躇したりしが、その中に、王の秘書官の、最も美しき衣きたるを見て、これこそ王よと思ひて、急に、躍りかゝり、一撃の下に、それを仆しぬ。敵兵、この様を見て、俄に、あはてふためきつゝ、とかくして、この少年を捕へぬ。

少年は、かくて、ポルセナ王の前に引き据ゑられたり。汝は何者ぞとの問に、答へて、彼は、靜に、余が名を、マチアスといふ。わが祖國の讐を報ぜむが爲に來れり。

余は、いま、天運、拙くして、わが志を達し得ざりしを恨とす。されど、城中ウツナをほ、一隊の決死の俠少年あり。想ふに、彼等は、よく、わが志について、この恨を報ずるならむと、いへり。

ポルセナ王は、いたく、驚ける様なりしが、やがて、憤怒の念に堪へずやありけむ、直に、部下に向つて、少年を焼き殺すべしと、命ぜしが、そのことばの、未だ終らざるに、少年は、つと立ちて、篝火のそば近く寄りぬ。高く、衣の袖をまくり上げて、左手をあらはし、やがて、自ら、烈火の中にさし入れたり。直立せるまゝ、態度をも

崩さず、顔色をも變ぜずして、靜に、わが手を火中に保てる大膽さに、一座皆、絶倒せむばかりなりき。王は、おどろきのあまり、稀有の勇士なり。放ちて、城中に歸らむむべしとて、そのまゝ、城中へ送り歸さしめたり。

ポルセナ王は、こゝに、羅馬の志氣の盛なるに驚きて、俄に、おそろしき心地のつきければ、急に、使を、城中にやりて、和を講ぜしめ、倉皇として、その國に引き返せり。

城中の喜、たとふるに物なく、市民は、擧りて、マチアスの豪膽なるを賞揚し、彼を呼びて、ステボラといへ

り。そは、左の手といふ義にして、彼の子孫は、世々、その名を傳へて、たのれの姓となし、以て、永く、祖先の功名に誇れり。

二三、一對の美談

元祿の頃、赤穂の義士、警家に亂入して、目ざす敵を、間十次郎が、鎗もて突き留めたるを、武林唯七、かけて、太刀もて、斬り伏せたり。さて、互に、首取らむとして、爭論に及び、既に、刃傷に及ばむとする折しも、大石藏之助、はからひて、十次郎に、とゞめ刺させ、唯七に、首

討たせられたれば、雙方、遺恨なかりきとなり。昔も、さる事あり。大江朝綱と、小野道風と、互に、手書の爭論して止まず。主上の御前にて、優劣を決せむとて、持ち出でしに、勅して、朝綱の手書の、道風に劣ること、譬へば、道風の學才の、朝綱に劣るが如しと、のたまひし故に、雙方、遺恨なかりしよし、江談抄にあり。かれとこれとは、古今文武雅俗、一對の美談なり。(齋藤彦麿著嘉多比抄志)

二四、石狩の昔話

昔、十勝國の強かりし時、幸奈の大酋長、全國の衆を

集め、隣國なる石狩の、稍衰へたるに乗じ、その國に侵入し、酋長と相視て、言葉戦を始め、もし服せざる時は、武力を用ゐて、寶物を奪はむとせり。石狩の人、この報を聞きて、などか恐れざらむ。夕張の大酋長は、全國の乙名を呼び集め、右の次第を告げ、かつ、いへらく、我が國は、人すくなく、勢弱し、武力にては、かなふまじければ、辯士を遣し、媾和の策を行ひ、彼等の國境に入らぬ様にせむこそ肝要なれ。この任に當るべき者は、誰かある。諸子、知る所の人あらば、思ひ思ひに、申し出でられよ」と、いふ聲に應じて、末席にありつる少年、眼をい

からし、肩をそびやかして、大音あげ、われ、願くは、この任に當らむ」と、いふ。一座の人々、驚きて、視れば、その少年は、上川郡なる内奈部村の志良鐵哥といふ者なりけり。この人は、元來、十勝國帶廣の酋長の庶子にて、幼き時より、母に隨ひて、石狩に來りしが、成長の後、豪邁の人となりて、辯論をよくすとのきこえあり。平生、石狩人の親切なる待遇に感じ、よき折あらば、身をすて、その恩に報ぜむと、心掛け居たりしを、今日、大酋長の言を聞き、國難に當らむと思ひて、望みけるなり。

大酋長、その人となりを察するに、いかにも、大事を

大車オウゴン折オウゴンし
託すべき風采ある者なりければ、悦びて、その請を許したるのみならず、即時に擧げて、副會長となし、延いて、己が次に坐せしむ。かくて、媾和の策を行ふため、幣物として、石狩國に、古より傳來せし寶物數種を取り出して、授け、れば、志良鐵哥は、これを受けて、家に歸り、旅装を調へて、途に上り、十勝、石狩、兩國の境なる佐幌嶺を越え、敵の進み來べき要處を選びて、假小屋をつくり、その中に居て、今か今かと、待ち待てり。

日を経て、十勝の大勢、麓に至りて、屯集せり。かくと見るより、志良鐵哥は、寶物を懷にして、十勝人の居る

ところにゆき、大呼していへらく、我は、石狩の副會長志良鐵哥といふものなり。こゝにて、諸君の來るを待ち居たり。願くは、諸君の會長に見參せむと、いへば、取次の者ども、これを引きて、幸奈の大會長の前に至る。志良鐵哥は、只、一應の色代イロダシして、御身は、誰なるぞと、問ひければ、幸奈の大會長某なりと、答へぬ。志良鐵哥、再び、御身は、何故、大勢を引率して、この地に屯集せるぞと、問ひければ、幸奈の大會長、答へて、いふやう、われ、聞く、石狩は、舊國にて、寶物に富めりと、我が國は、人ねほしといへど、寶物に乏しければ、貴國の寶物を得む爲

に來れり。貴國、これを許さむや」といふ。志良鐵哥、御身の宣ふことは、道理にあはぬことなれば、思ひ止り給へ。そも、御身は、十勝川の源を知り給へりや、又、石狩川の源を知り給へりや」といふ。幸奈の大酋長、我、よく、これを知れり。知りたれば、いかゞあるべきぞ」といふ。志良鐵哥、御身、もし、よく、二川の源を知り給ふ程ならば、この度の如き非道なる御振舞あるべき様なかるべし。それ、十勝川は、源を、大十勝岳に發するにあらずや。石狩川も、亦、源を、同じ大十勝岳に發するにあらずや。十勝川、石狩川は、昔より、蝦夷が父母の川と唱へたり。

quench the others

二川の兩國に注ぐ有様を見るに、一人の母の二つの乳房より、乳汁の出づるが如し。兩國の人は、この乳汁に養はれて、生を保つことなれば、兩國の蝦夷は、兄弟なるべし。果して、兄弟ならば、互に、暴を加ふることあるべからず。殊に、仁愛なる貴國人のなすに忍びざることなるべし。こゝ、よくよく、勘辨し給はむや」といふを聞きて、幸奈の大酋長は、黙して居たりしが、やゝありて、笑ひながら、いふやうは、足下、安心せよ。前にいひしは戯言なり。足下、宜しく、わがために、夕張の大酋長に告げ給へ。今より後は、十勝、石狩の兩國、兄弟の交を

なして、互に、相侵すことなかるべし」と。これを聞くより、志良鐵哥は、俄に、容を改め、頓首再拜して、いひけるは、幸奈の長者、海の如き量をもちて、我が言を容れ給ひ、兩國、永く、相侵すことなからむことを誓ひ給ふ。兩國の幸、何事か、これに過ぎむ。我が夕張の大酋長、兼ねて、某に命じて、いへらく、汝、幸にして、幸奈の大酋長に謁見することを得ば、これ奉れ」とて、石狩に、古より傳來せる七種の寶物を、某に託せられぬ。願くは、却くることなかれ」とて、懷中より取り出して、捧げたれば、幸奈の大酋長、大に悦びて、これを受け、かつ、いへらく、夕

張の大酋長、われに、厚幣を贈れり。われも、また、これに酬ゆる所あらむ」とて、先づ、酒を設けて、志良鐵哥を饗し、一人の乙名をして、これを送らしめたるのみならず、五種の寶物をさへ贈れり。

これより、兩國、永く、無事なりしは、全く、志良鐵哥の勇俠と、辭令の巧なるとによれるなれども、夕張の大酋長に、人を知る明なく、幸奈の大酋長に、事理を聞きわくる聰なからしめたらむには、志良鐵哥は、獨、功をなすこと能はざりしなるべし。(細川潤次郎著なし草)

二五、加藤清正

家康公、二條にて、御物語の次、當時、天下に加藤肥後守清正に及ぶものはあるまじ」との給ふを、本多佐渡守正信、殿は、誰が事を賞め給ふかと、いへば、加藤肥後がことよ」との給ふ。そは、太閤が時に、虎之助といひし小倅が事かと、いへば、肥後が事を知らぬ者やある」との給ふ。正信、某、年老いて、物わすれする事のうたてさよ。されど、殿は、信玄、謙信はじめ、數多の名人の上を御覽じ盡されし御目にて、加藤などのこと、賞め給ふは、いかにぞや。さるにても、加藤がためには、上なき名譽

なり」といへば、肥後が事は、われよく知れり。當時、西國の事、任せ置きぬれども、彼には、一つの疵あれば、ひたぶるに、頼みがたし」との給ふ。正信、何事に侍るか」といへば、物に危き心あり。今少し、心落ちつかば、實に、たち並ぶ者はあるまじ」との給ふ。正信、上意の如く、危き心ありて、剛氣に過ぎたるは、疵なり。武田勝頼も、かゝる癖ありしゆゑ、遂には、國をも失ひたるなり、惜むべし、惜むべし」といふ。折しも、末座に、京の商人など陪して承り居しが、後に、清正に、告げ知らせければ、清正、さては、君には、われを、心あやふき者とねぼすよ」と、心附き

て、これより、物ごと、慎密にして、持重になりけりとま
り。

後年、正信が子、上野介正純、この事を、父に問ひけれ
ば、正信、こは、實に、清正を賞め給ふにあらず。そのころ、
當家、草創の頃なれば、彼、もし、鎮西の人々にすゝめて、
秀頼に與黨せしめむには、ゆゑしき大事なり。かの危
き心なくばと、仰せられし御一言を承りしより、かれ、
何となく、重りかになりて、生涯、過誤なくて、果てしな
り。これ、君の御智略の深遠にして、凡慮のはかり知る
べきにあらず。それを、たゞ、その事とのみ思ひて、われ

に問ふは、汝が智慮の淺きとやいはむ。その心にては、
天下の機務を執る事、かなふべからず、よくよく、工夫
せよと、諭したりとぞ。

正信、後に、清正と親しくなりしが、ある時、正信、御内
意を受けて、清正に諷諭せし事、三個條あり。

一、當時の諸大名、みな、浪華に着岸するや、直に、駿河、
江戸に參觀する事なるに、清正は、いつも、大阪に、
數日とゞまり、秀頼の起居を候してのち、東國へ
參觀す。それにも及ぶまじと思ふは、いかゞ。

二、近頃、諸大名、參觀のをり、従者も、昔よりは、減少せ

しに、清正は、以前にかはらず、多勢を召し具するは、いかゞ。

三、當時、清正がやうに、面に、鬚多くはやし置くものなし。謁見の折など、異様に見ゆれば、これを、剃り落されては、いかゞ。

と、いふことなり。清正、聞きて、この三條、御邊の詞を待つにも及ばず、某も、かねて心づき、世の譏評にもならむかと思ひつるが、さりとして、また、改めかぬる事どもなり。

一、御邊も知らるゝ如く、某は、じめは、故太閤の拔擢

によりて、肥後半國を賜り、當家になりて、小西が舊領をまし賜り、一國の主となりしは、當家の御恩は、いふまでもなけれど、そのかみ、舊恩受けし太閤の御子のねはする處を、餘所に見て、空しく、通らむは、武士の本意にあらざれば、今更、この事、やめがたし。

二、參觀の陪從を減ぜば、費用も省け、家臣も喜ぶべき事なれども、西國の大名、常は、在國して、御用の折のみ召さるゝならば、ともかくも、近頃の如く、交代して、參觀するからは、臨時に、御用を仰せつ

けられむも、はかりがたし。その時、領國はるかにして、國許の人、召し呼ばむに、急遽には、來らず。すこしなりとも、當地にあり合ふ者どもにて、御用を辨ぜむために、餘人よりは、多く、召し連るゝなれば、これまた、減じがたし。

三、頬鬚、剃り落さば、我も、さぞ、心涼しくなりなむと思へども、年若きより、この鬚に、頬當して、甲の緒を志むるに、その心地よさ、いふばかりなし。今、かかる御治世に遭ひても、心地よさの忘れがたさに、思ひ切りて、剃りがたし。

御邊が懇志もて、いはるゝ事を、一條も承け引かずとありては、いかゞなれど、以上、申す如くなれば、よく、聞き分けて、悪しからず、思はれよと、いひしかば、正信、思の外にて、その旨、言上せしに、清正が、いひごとよと、ばかりにて、笑はせられきとなむ。(成島司直著徳川實記附録)

二六、含蓄ある詞づかひ

獨逸國の名相ビスマルク、嘗て公使として、佛蘭西國に駐劄せしことあり。その頃は、兩國平和のをりなりければ、佛帝ナポレオン第三世は、飽くまで、好意を

示さむとて、志ば志ば、ビスマルクを招きて、手厚く、饗應などして、打解け給へり。たまたま、帝の、新に、造營し給へる宮殿の、落成せしにより、そを見せむとて、ある日、また、ビスマルクを招き給へり。この宮殿の一間の壁は、いかなる製法によりて製したる、彩色もて塗れるにか、一通は、白色に見ゆれども、朝夕の日の光の、さし方によりては、種々の色にも見えたりとぞ。帝、これを指して、いかなる色と思ふと、問はれしに、ビスマルクは、何心なく、白色なりと、答へたり。稍、ありて、帝、宣ふは、壁の色、いまは、白色なれども、光線のさし方により

ては、種々の色に見ゆれば、うちつけに、白色とはいふべからず。もし、白色なりと定めたらむには、外の色になりたる時に見たるものは、これを非難して、虚言とやいはむ。されば、この答は、余が目には、白色に見ゆと、いは、聊の違なれど、詞の意味に餘地ありて、その言中らずといへども、非難せらるゝ事なかるべし。子は、政事家のきこえ、世にかくれなき人なり。政事の話などには、わきて、詞を慎み、含蓄ある様ならむことこそ望ましけれと、いはれたり。ビスマルクは、この言を、げにもと思ひ、その後、外國應接などのをりには、いつも、

この事を忘れずして、これがために、利益を得たること少からざりけり。ピスマルク、或時親しき人に向ひ、佛朗西帝は、獨逸國の敵となりたれども、余が爲には、一言の師ともいふべき人なり」と語りきとかや。(細川潤次郎著なしくさ)

二七、レンシングの比喩談數則

鷺毛の純白なるは、まことに、霜雪と、その美を競ふに、足れり。嘗て、一個の鷺の、志きりに、その羽毛の美を誇れるがありて、ひそかに、思へらく、わが、前生は、恐ら

くは、鵠ハクなりしならむと。これより、彼は、その同類と交遊することハクを、屑とせず、ひとり、その群を離れて、志ひて、鷹揚なる態度を装ひつゝ、優然として、池上に逍遙せり。かくて、彼は、ふと、わが頸ネのつけねの短きに過ぎ、て、外觀の醜みにくきに心づきぬ。やがて、満身の力を込めて、そを、引き延のさむとせり。されど、そは、あだなりき。彼の頸のつけねは、あまりに、武骨過ぎて、引き延のさむにも、力及ばざりき。さても、彼が苦心の結果は、いかなりしぞ。彼は、鵠ハクとなること能はずして、却りて、一個の笑ふべき鷺ハクとなれり。

驢馬、獵馬と競走を試み、いたく敗をとりにて、世の物笑を招きたり。夫かも、彼は、平然として、いへり。余は、今にして、わが敗れしことの偶然にあらざるを知れり。余は、實に、一二個月前より、足を傷めて、その痛、今に、やまざるなり」と。

嘗て、一匹の犬の、諸國を旅行して、歸り來れるが、その仲間に向ひて、われらの種族は、到るところ、皆、變種を生じて、その純粹なるものは、今や、殆ど、そのあとを絶てり。わが見し中に、たゞ、印度といふ遠き國にのみ、なほ、眞の、正種の犬ありて、彼等は、實に、獅子に對する

も、恐れざる勇悍の性を具へたり」と、いふに、それを聞き居たりし一匹の獵犬は、直に、彼は、果して、獅子を懼伏する力あるか」と、いふ。なに、懼伏とや。そは、余の即答に苦むところなり。されど、余は、少くとも、彼は、獅子に對して、悚然たるものにあらざるを信ず」と、いふ。獵犬は、すかさず、さては、君の稱譽する印度の犬は、所謂、愚中の少愚なるものに過ぎず」と、いひて、聲たて、笑へりとかや。

曾て、一匹の驢馬を、その危難より救ひたりし獅子の、それと、相伴うて、森に行けるあり。無遠慮なる鶏、こ

れを見て、樹上より呼びて曰く、「英邁なる君よ、君は、驢馬の如き輩と伍するを恥ぢざるか」と。この時、獅子は、靜に、何者たりとも、來りて、余に投ずるものは、余は、好みて、仁俠を施さむとすと、いへり。大人君子は、いかなる弱者をも棄てざるが故に、彼等は、常に、その下に集ることを喜ぶ。

亂暴なる一少年をのせて、さも、得意氣に、こゝかしこ、駈けまはれる馬あり。牛、その馬に向ひ、さばかりの少年に御せらるゝこと、汝が至大の恥辱にあらずや」と、いへば、馬は、ふりかへりつゝ、事もなげに答へて、さ

れど、いま、この一少年を振り落したればとて、余は、幾何の名譽をか博し得むと、いへりきとぞ。

二八、快觀と悲觀

世には、快觀派あり。悲觀派あり。一派の眼は、光明なる半面に注ぎ、一派の眼は、暗黒なる半面に注ぐ。

二者、各、その理あり。二者、各、その道あり。然れども、もし、いづれに與せむといはゞ、吾人は、むしろ、快觀派に與せむのみ。

快觀派は、今日が、昨日よりも、善きを信ずるものな

り。人生は、光明と暗黒と相互錯雜す。然れども、終局の勝利は、つねに、光明にあり。吾人、いかで、快觀に與せざるを得むや。(徳富猪一郎著 靜思餘錄)

二九、カンニットヘルスターンソー

昔、獨逸のとある片田舎に、一人の仕立職ありき。日に月に開け行くなる、今のめでたき時を、空しく、かゝるところに埋れて、あたら、槽檻の間に朽ち果てむことは、いかに、口惜しきかぎりなりと、一朝、勇氣をふり起し、われも、一たび、大都の中に立ちて、身にあまる

富貴の樂を得ずてあらむやと、決心しぬ。されども、とより、職人の身の旅費すらも、心にまかせぬ境遇なりしかば、いかにともせむすべなくて、空しく、うらめしき月日を送りてありけり。かくて、三年にもなりぬ。いつか、少しの貯も出で來しかば、今はと思ひ定め、親兄弟にも、別を告げて、住み馴れし故郷を後に、遠く、阿姆斯特ルダムAmsterdamの都へと、出て立ちぬ。

交通の機關、なほ、完備せざりし當時にありては、獨逸より、阿姆斯特ルダムへの行路は、さまで、易き道にもあらざりしかど、志ある身には、旅路の憂さも、心に

はかゝらず。晝は、青山緑水の景色に、限なき觀賞の思
をやり、夜は、また、假寢の枕に、あやしき妄想の夢を結
びて、嬉しく、楽しきが中には、やくも、アムステルダム
に到着しぬ。

當時、世界文明の中心と稱せられたる、この都の、い
かばかり美しく、いかばかり盛ならむとは、かねて、よ
り、心に思ひ浮べしかど、今、眼前にあらはれたる都府
の繁盛のれそろしさに、彼は、たゞ、あきれ驚きて、志ば
し、佇立せり。げに、彼のあきれ驚きしも無理ならじ、う
ち仰がるゝばかりなる金碧樓臺の、屋を連ねて、高く、

空中に聳えたるが、町より町にうちつゞきたる中を、
馬車どもの、縦横に、馳せ違ひて、西に、東に、行きかふ人
々の、綺羅錦繡に、その華美を競ひあへる、見る目も、ま
ばゆきほどなり。

やがて、とある町のはづれに來ぬ。そこには、數寄を
極めたる高閣の、すぐれて大なるが立てり。世には、は
かなき陋屋の中に埋れて、朝夕を圖らぬ人すらある
ものを、かゝる高閣に、起臥自由の生活を送りて、限な
き富貴の榮華に誇るなど、さても、いかなる幸福の人
ならむと、思ふにつけて、その人の事のきかまほしく、

傍の人に向ひて、この高閣は何人の所有にかと問ふ。問はれし人は、あやにくにも、獨逸語を解せざりしかば、たゞ、カンニットヘルスターンとのみ答へて、行き過ぎぬ。カンニットヘルスターンとは、われは、君のことばを解せずと、いふ和蘭語なれど、彼は、また、少しも和蘭語を知らざりしかば、そを、こゝなる家の主人の名なりと思ひぬ。さて、カンニットヘルスターン君の幸福なることよと、彼は、思はず、叫べり。カンニットヘルスターンの名は、今や、忘るべからざる印象を、彼の腦裏に刻めり。

もとより、志す家のあるにもあらねば、心のゆくにまかせつゝ、あちらこちらと、逍遙せしに、やがて、港の側に出でぬ。港内の雄大なる光景は、更に、彼を驚歎せしめたり。未だ、嘗て、見たることなき偉大なる船舶、舳艫相依りて、檣帆の林立せるさま、壯快といはむにも、ことば足らざるべし。そが中に、埠頭に近く、錨を下せる一大船の、印度あたりより歸り來りしものと見ゆるが、満載せる諸の荷物を陸揚しつゝ、あり。岸のほとりに積み上げたる荷物の、小山の如くなるげに、幾千萬の價かあらむ。彼は、たゞ、あきれにあきれ、去ばし

のほどは、うちまもりてありしが、やがて、人夫の側近く寄りて、さても、この船、この寶、こは、何人の所有にか」と問ひぬ。カンニットヘルスターンとの答は、前とかはらざりき。嗚呼、カンニットヘルスターン君の富のれそるしさよ、大厦高樓の人をれどるかすだにあるを、更にかゝる大船を有し、かゝる高價の貨物をも支配するは、げに、王公も及び難き富貴を極めたる人かな」と、彼は、ひたすら、感じ入りぬ。

三〇、カンニットヘルスターンその二

彼は、埠頭に立ちて、志ばし、見つめてありしが、やがて、踵をめぐらして、もと來し方へと、たどり行きぬ。心の中には、様々の妄想、雲のごとく起れり。一たびは、カンニットヘルスターンの富貴を羨みて、何とも知らぬ深愁に沈み、はては、われも、また、いつか、志遂げて、かくならむ折もあらむと、はかなき望に、胸を躍らせ、さても、富貴の人となりたらむ折は、いかにして、その富を守るべきか、かゝる事業も企てむ、かゝる邸宅をも構へむなど、はてしなき夢心地に驅られつゝ、われにもあらで、歩を移し、ほどこに、街頭、俄に、騒しくなりきて、

人々、どよみ渡れり。驚きて、ふと見やれば、葬送のいと
なみなるべし、まばゆきばかりにみがきなせる棺を
護りて、一様の葬衣に、前後左右を取り圍みたる一行
の人々、皆、哀を含めり。花環など、數知れぬまでとり重
ねて、つき従ふ會葬者の列、はてしもなく、うち續き、そ
の人數、幾千人なるを知らず。その式の盛大なる、世に
知名の人ならては、いかでか、かゝるべきとれもはれ
ければ、彼は、その行列の一人に向ひて、いかなる御方
の御葬送にかと、問ひぬ。カニットヘルスターンとい
ふ答は、こゝにても、また、かはらざりき。カニットヘル

スターン君の葬送とやと、叫びて、彼は、殆ど、絶倒せむ
と志たり。嗚呼、世界の富貴を、一身に集めたる人も、定
命は免れぬものか。世は、無常とは聞きしかど、かくま
でに、はかなきものなりとは、知らざりしよと、思ふに
つれて、何とも分かぬ悲哀の情、胸に迫り來ぬ。かすか
に響く鐘の聲、今はの哀を添へて、寺へと急ぐなるに、
天地は、寂然として、たゞ、過ぎ行く人々の、履の音のみ
高し。

彼は、堪へかねて、そのまま、泣き崩れしが、やがて、立
ち上りて、たぼつかなくも、歩を移し、に、さきの高閣

の前に出てぬ。まばゆかりし金碧、今なほ、舊に依りて新なるに、さても、その人は、既に、世にあらぬかと、志きりに、思ひむすばほれてあるほどに、不思議や、ふと、一種の信念起りきぬ。人生は、いかにも無常なり。古人は、「この無常の世には、かなき富貴を、いかにかせむ」と、いひしが、まことに然り、まことに然りと、一々、胸にあたりて、今まで、羨望の念に堪へざりし、かの富貴も、今は、全く、心を引かぬ様になりぬ。かく、思ひつくと共に、俄に、古英雄のあとの、ひたすらに、慕はしくなりぬ。よしや、身は、はかなく朽ち果つとも、かの國の爲に盡し、

功業の、千古に亘りて、その光を失はぬためしこそ、われらの倣ふべく、従ふべき道なれと、彼は、こゝに、堅く、思ひ定めぬ。

翻然とさとりたる彼は、徒に、富貴をのみ追ひたりし昨日の、恥しさに堪へず、倉皇として、故國に歸りしが、今は、中々に、貧賤の淡きを喜び、晝は、我が職業を勵みて、その日の生活を送り、夜は、書冊を友として、古英雄のあとを追ひ、諄々として、少しも、倦まざりき。かくて、その後、祖國に、三十年戦争の大亂起りし時、奮ひて、軍隊の列に入り、武勇三軍を壓して、遂に、將官に拔擢

せられ、英名を、一世に轟せりといふ。

中等國語讀本卷四終

明治三十四年十一月十五日 印刷
明治三十四年十一月十九日 發行
明治三十五年二月四日 訂正再版印刷
明治三十五年二月七日 訂正再版發行

定價表	
一、二冊	每冊貳拾貳錢
三、四冊	每冊貳拾四錢
五、六冊	每冊貳拾四錢
七、八冊	每冊貳拾四錢
九、十冊	每冊貳拾四錢

明治三十三年五月十四日
中等學校用文部省檢定



著者 落合直文

東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發行者 三樹一平

東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 鈴木友三郎

東京市京橋區四紺屋町二十六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)
大阪市東區備後町四丁目
(特電話東二四九番)

明治書院 吉岡平助

賀川正之